

庭から昇ったロケット雲

2008(平成20)年6月10日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督・脚本・製作＝マイケル・ポーリッシュ／脚本・製作＝マーク・ポーリッシュ／出演＝ビリー・ボブ・ソントン／ヴァージニア・マドセン／ブルース・ダーン／ティム・ブレイク・ネルソン／マックス・シエリオット／ローガン・ポーリッシュ／ジャスパー・ポーリッシュ／マーク・ポーリッシュ／ジョン・グリース／ブルース・ウィリス（デスペラード配給／2007年アメリカ映画／104分）

……1人のファーマーが庭からロケットを打ち上げ。そんな時代を先取りした映画が遂に登場！ まさに、21世紀は新たな宇宙イヤーの始まりだ。岡村孝子の「夢」？ クラーク博士の「大志」？ それとも、松坂大輔の「目標」？ その異同をしっかりと！ ロケット打ち上げの成否は……？ そんな結果論よりも大切なのは、家族の絆。それをお忘れなく。

また兄弟で監督・脚本・製作を！

『ノーカントリー』（07年）によって、遂にイーサン・コーエンとジョエル・コーエンのコーエン兄弟がアカデミー賞監督賞を受賞した。そんな中、『庭から昇ったロケット雲』によって、マイケル・ポーリッシュとマーク・ポーリッシュのポーリッシュ兄弟が、監督2作目にしてメジャーデビューすることに。

彼らが目をつけ脚本化したのは、民間での宇宙旅行が身近に迫っている昨今、宇宙への旅の夢をもち続けている男の話。その男は、かつてNASAで働いていた宇宙飛行士のチャーリー・ファーマー（ビリー・ボブ・ソントン）だ。彼は父親が急死したため実家の農場を継いだが、愛する妻オーディ（ヴァージニア・マドセン）と15歳の長男シェパード（マックス・シエリオット）、そしてまだ幼いサンシャイン（ローガン・ポーリッシュ）とスタンリー（ジャスパー・ポーリッシュ）という2人の娘に支えられながら、自分の農場から宇宙へ旅立ち戻ってくることを夢見ていた。

そんなバカな！ 誰もそう思うはずだが、それを脚本化・映画化したのは、まさにコロンブスの卵……？

弁護士の視点からは……？

チャーリーはかつて宇宙飛行士だったのだから、宇宙に関する各種法規はちゃんと勉強したはず。都市問題や都市法をライフワークとしている私は、特に宇宙に関する各種法規に詳しいわけではない。しかし、地球上を飛び回るロケットやミサイルの通行ルールや、月はもちろん水星、火星等の領有権（？）について、それなりの法規が整備されているのは当然……？

したがって、この映画で描かれる、一民間人にすぎないチャーリーがロケットを製作して勝手な軌道を飛ばしたり、個人的に1万ポンド（4.5トン）という大量の高レベルのロケット用燃料を買い込む行動に対して、FBI、CIA、FAA（連邦航空局）や軍隊が警戒したのは、弁護士の私の目から見ればむしろ当然。なぜなら、チャーリーのような行動を「自由化」したのでは国家の安全、宇宙の安全が脅かされることは明らかだから。

さて、ロケットは完成したものの、資金難のため燃料の調達に苦しんでいるチャーリーが決断した方策とは……？

「夢を見る男」vs.「夢を見ない男」

私の大好きな岡村孝子の名曲『夢をあきらめないで』を持ち出すまでもなく、「夢」は少年を成長させる大きな動機。他方、クラーク博士は「少年よ大志を抱け」との名言を残したが、この「大志」と「夢」はどう違うの……？

他方、これに対置されるのが『夢を見ない男 松坂大輔』。そんなタイトルの本の中で「平成の怪物」松坂大輔が語るのは、「僕は人生で『夢』は見ない。あるのは常に『目標』で、それは絶対にクリアできるものだと思ってる」との名言。

『庭から昇ったロケット雲』のテーマは岡村孝子と同じ「夢」だが、さて松坂大輔なら、チャーリーのいつまでも諦めない宇宙への夢をどのように評価するのだろうか……？

こんな家族の絆があれば……

日本では今、去る6月8日に東京秋葉原で起きた通り魔事件の話題で持ちきり。トラックで交差点に突っ込んで人をはね、続いて手に持ったナイフで次々と通行人を刺

していった25歳の加藤容疑者の人物像はこれから詳細に解き明かされるはずだが、6月10日付毎日新聞夕刊は、彼は携帯電話専用のネット掲示板で、「みんな殺してしまいたい」などと書き込みをしていたことが判明したと報道した。「イライラする」「何か壊れました」「友達欲しい」などの書き込みを見ていると、ここにも孤独で何の夢も持てなくなった日本の若者の姿が……。

なぜ、日本の若者がそうってしまったのかと考えると、必然的に「家族とは？」というテーマに行き着くが、その点『庭から昇ったロケット雲』を観ていると、アメリカ人の家族の絆の強さに感心。ファーマー家では、家族そろっての食事と家族そろっての公開討論が原則(?)だが、同時に子供の眠る時間など厳格なルールがあるし、ママの「命令」は絶対的……？

チャーリーが宇宙への夢を持ち続け、庭でロケットづくりに精を出すことができるのも、そんな家族の絆があつてのことだ。また、パパが尊敬されない状況下では「家族の絆」などありえないから、チャーリーが子供たちからパパとして尊敬されるために頑張っている努力も相当のもの。日本でもこんな家族の絆があれば、加藤容疑者のような若者が出現することはないはずだが……。

夢の実現は……？

いくら元宇宙飛行士だといっても、そのことと、自分でロケットをつくり、それを打ち上げ、地球を何周も回り、また地球に戻ってくるという作業を一民間人だけでやり遂げることができるかどうかは別問題。さらに、ロケット製作技術の問題、協力者の問題、お金の問題、燃料の問題、国家的規制の問題などクリアしなければならない難問が山積していたのも当然。

したがって、誰がどう考えても、チャーリーが見ているのはあくまで夢であって、松坂大輔の言う「目標」ではないはず。もっとも、そんなことを言ってしまうては、この映画は成り立たないのでは……？ そんな風に期待と不安をもたせながら、スクリーン上ではチャーリーによる厳しい現実との闘いが続いていくが、さてその行き着くところは……？

この映画は一民間人によるロケット打ち上げという時代を先取りしたテーマだけに、いくらうまく脚本を書いても少しムリ筋と思える点が多い。また、現実のロケット打ち上げの様子を見ても、少し荒っぽいのではという印象は否定できない。したがって、



© 2007 Warner Bros.Ent.All Rights Reserved.

この映画を楽しむためにはそういう視点を極力抑え、夢という視点、家族の絆という視点で観ることをお勧めしたい。

そんな目で見れば、「失敗は成功の元」という格言も理解できるし、いかにもアメリカ映画らしいハッピーエンドにも納得できるのでは……？

2008(平成20)年 6 月11日記